

# 函館中央病院

函館市の函館中央病院は、今年、NICU開設（高田竹人理事長、本橋 50周年を迎えた。切迫早産や糖尿病などの合併症を担う妊娠、多胎妊娠などさまざまなハイリスク症例に科を標榜し「断らない医療」を実践している。年間手術件数は約5千件に上り、特に周産期分野では、道南唯一の総合周産期母子医療センターとして、NICU（新生児特定集中治療室）とGCU（新生児回復室）を有している。



NICUでは、胎児・新生児に対応した適切なケアを提供している

1900年に前身となる函館慈恵院が創設され、30年に「中央病院」が発足。当時から地域住民のための手厚い医療・福祉に取り組んでいた。

新生児・未熟児医療について、73年に未熟児センターを開設しているが、学会発表記録などから、未熟児センター開設前より、新生児・未熟児医療を行っていたことが伺える。76年にNICU 3床を設置し、稼働を開始。同時期に新生児・未熟児医療は基本的に地域で完結すべきとの考えか

## 地域支える未熟児医療

### NICU開設50周年 育児まで広く支援

ら、函館中央病院が「情報センター」の役割を担い、他院と連動した受け入れ態勢の構築、地域化を図るなど、道南地区の新生児・未熟児医療をけん引してきた。

この頃から、医療の進歩による救命率上昇に伴い、児のQOLが求められるようになり、保健所とのカンファレンス、フットケアの長期継続なども行っている。

2008年に、総合周産期母子医療センターの指定を受け、釧路赤十字病院、市立札幌病院に続き、道内では3施設目の指定施設となった。17年には未熟児センターを「NICU・GCU」と改称。現在はNICU9床、GCU18床を持つ急性期病院として、地域住民に広く認知されている。

小児科は、小児地域



NICU開設50周年記念講演会で講和する、木田副院長・総合周産期センター長

行う。

20年の国勢調査では、道内179市町村のうち、函館市の人口減数は全道1位となり、道南全体の出生数は2000年から22年の間に、3903人から1740人と激減。同病院のNICUの年間入院数も、2022年時点で162人と年々減少傾向にあり、地域の子どもの減っていることが分かる。

医療センター病院に指定されているほか、発達障害で母親と胎児・新生児を害、痙攣などの神経疾患を支えることを重視し、助けた子を育てる小児科の診療にも強みを持って産師の育児支援外来「ベビーフォローアップ」を開設。目的として子ども子育て支援室を開設し、母子支援や保健所を含む他機関の連携強化を図っている。産科では、道南地域のハイリスク分娩を一手に力を見守るほか、若年妊娠など、さまざまな背景を断らない医療を実践して、出産だけでなく、妊婦、母児双方の支援を

と連携しながら対応し、前進に向け努力したい」と話す。